

研究だより



香川大学教育学部 附属坂出小学校

ごあいさつ

校長 まつむら まさふみ
松村 雅文

清秋の候、皆様方におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。日ごろより、本校の教育研究にご理解・ご協力いただき感謝しております。さて、本校では本年度の研究テーマを「『思考力』を育成するユニバーサルデザインの授業づくり（2年次）－特別支援教育の考えを生かして、すべての子どもの思考活動を保障する－」としました。昨年の研究の成果を踏まえて、思考活動においてより効果的な働きかけを明らかにすることと、子どもたちの学び合いの過程を充実させること等を今年の課題とし、すべく鋭意取り組んでおります。

この成果は、平成26年1月30日・31日に開催します第97回教育研究発表会で提案いたします。また、本年度も文部科学省から5名の講師をお招きし、講演とシンポジウムを企画しています。万障お繰り合わせの上、ご参会賜りますようお願い申し上げます。



【目次】

- ◇ごあいさつ
 - ・第97回教育研究発表会のご案内・1
- ◇「思考力」の育成に向けて
 - ・研究の概要・・・・・・・・・・2
 - ・実践紹介・・・・・・・・・・3～8
- ◇本校の外国語活動
 - ・外国語活動の概要・・・・・・・・9
 - ・実践紹介・・・・・・・・・・9
- ◇書籍の紹介・・・・・・・・・・10
- ◇特別支援教育の考えを生かして・・10
- ◇あとがき・・・・・・・・・・10

●●● 第97回附属坂出小学校教育研究発表会のご案内 ●●●

研究主題

「思考力」を育成するユニバーサルデザインの授業づくり(2年次)

-特別支援教育の考えを生かして、すべての子どもの思考活動を保障する-

平成26年1月30日(木)・31日(金)

授業公開
(2日間で計17の授業)

【1日目】 てい だん 鼎 談

【ユニバーサルデザインの授業づくりについて】

文部科学省初等中等教育局
特別支援教育課特別支援教育調査官

たんの てつや
丹野 哲也 先生

特別支援教育と
教科教育の融合について
語り合います

【2日目】分科会講演・シンポジウム

分科会講演（これから求められる思考力について）



文部科学省初等中等教育局
教育課程課 教科調査官

国語科 みとべしゅうじ
水戸部 修治 先生



文部科学省初等中等教育局
教育課程課 教科調査官

社会科 さわい ようすけ
澤井 陽介 先生



文部科学省初等中等教育局
教育課程課 教科調査官

理科 むらやま てつや
村山 哲哉 先生



文部科学省初等中等教育局
特別支援教育課特別支援教育調査官

特別支援教育 たんの てつや
丹野 哲也 先生

シンポジウム（4名の調査官と思考力育成について語り合う）

《シンポジスト》 水戸部先生，澤井先生，村山先生，丹野先生

研究の概要

「思考力」を育成するユニバーサルデザインの授業づくり(2年次) －特別支援教育の考えを生かして、すべての子どもの思考活動を保障する－

1 研究主題について

「今世紀最初の20年に起こる変化は、過去のいかなる変化より大きい」(エリック・ホッファー、社会哲学者)。今、目の前にいる子どもたちは、この変化の激しい社会を生き抜いていかなければなりません。そのためにも「思考力の育成」が重要となります。問題解決の過程で働く思考力を育成することは、社会を生き抜く力につながると言えるでしょう。

一方、小学校の通常の学級において、8%近い児童が「知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難をもっている」と言われています(文部科学省、2012)。このような子どもも、そうでない子どもも共に学ぶ授業づくりが大切になります。「ユニバーサルデザインの授業づくり」が注目されているゆえんです。

「思考力」は、「基礎的・基本的な知識及び技能」と両輪となって働きます。また、「学習意欲」は思考の推進力となります。先行研究では、「知識・技能」や「学習意欲」を高めるユニバーサルデザインの授業づくりが提案されていますが、それらと「思考力」との関係を明らかにし、思考力育成を目指す研究については、まだ余地が残されていると考えられます。私たちが着目したのは、その『思考力』を育成するユニバーサルデザインの授業づくりです。

2 研究副主題について

昨年度の授業づくりでは、子どもの認知特性や教材の特性に応じて、特別支援教育の考えを生かした働きかけを行うことで、「知識・技能」や「学習意欲」の向上を図りました。しかし、教師が支援しようとする思いが強いため、授業における子ども同士の関係に目が向きにくくなってしまったこともありました。「思考活動を保障する」ためには、思考に必要な「知識・技能」「学習意欲」を高めるとともに、自分たちの力で問題を解決する場が重要となります。

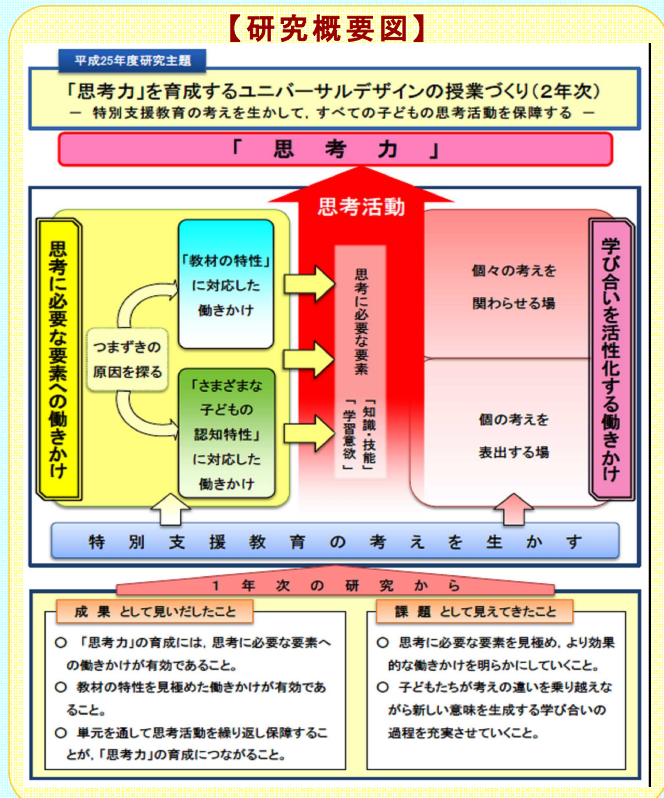
3 本年度の重点

(1) 働きかけの複数化

さまざまな子どもの認知特性や教材の特性に対応するための複数の働きかけを提案します。一つの働きかけで効果を追究することに加え、複数の働きかけを効果的に組み合わせたり、個に応じて選択させたりしながら、学習活動全体でユニバーサルデザインの授業づくりを目指していきます。

(2) 学び合いの活性化

思考は、自分の考えと友達の間を歩き来しながら深まっていきます。そこで、本年度は、「個の考えを表出する場」「個々の考えを関わらせる場」に着目し、学び合いの活性化を図っていきます。



次頁から各教科の実践事例を載せています。

実践紹介

国語科

第5学年「物語の構成に気をつけて読もう - 『世界でいちばんやかましい音』 -」

なかた ゆうじ
中田 祐二

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

物語を読み進める際、既読の場面までの叙述を手がかりに、その後の展開を想像する力

思考活動

知識・技能

物語における「設定」「展開」「山場」「結末」の四つの部分の役割を知り、その内容を正しく読むことができる。

本時では

教科書教材『世界でいちばんやかましい音』で身につけた上記「知識・技能」を活用しながら、『あらしのよるに』（きむらゆういち作）を読んでいきました。この物語は、『世界で～』とは異なり、「山場」の前で終わってしまうため、構成を読む際の子どもの戸惑いが想定されました。

そこで、物語の移り変わりを端的に表す挿絵を10枚、読み聞かせとともに板書上に並べました。10枚のうち8枚目までは夜の絵。9、10枚目でしだいに夜が明け、明るくなっており、これからの話の展開を期待させます。



【10枚の挿絵から山場を探す】



【3枚の挿絵から物語の続きを想像】

この働きかけにより、子どもたちは、この後が「山場」であることを捉え、「オオカミとヤギだけれど、きっと仲良くなるだろう。」のように物語の大きな変化を想像していきました。その際、その後の展開を3枚の挿絵の中から選ぶようにして想像を促すことで、どの子も自分なりの想像を膨らませることができました。さらに全体交流で出された「設定・展開」から「山場」への変化を対比して板書上に示すことで、子どもたちは山場の役割をより明確に捉え、新しい展開を想像しようとしていました。

社会科

第3学年「めぐって 見えた 学校のまわり」

ふじもと ひろふみ
藤本 博文

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

住宅や店の広がり、公共施設の位置、道路の様子等を手がかりに、探検したコースを比較・類別する力

思考活動

知識

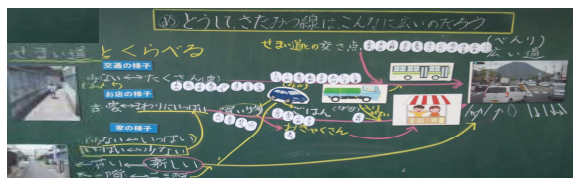
建物について…家や店、主な公共施設、古くから残る建造物等がそれぞれどこにあるかを知っている。
交通について…道路の左右に見える建物や道路のつながり、道路を通る人や車両の種類を知っている。

本時では

学校の周りを探検した際に歩いた複数の道路について、その広さの違いに疑問をもち、旧貞光線が広い理由を考えました。手がかりとなる上記「知識」を得る際、1枚の白地図に複数の情報が混在すると、建物の広がりが見えなくなることが予想されました。そこで、家、商店、人、車という視点で調べたものの位置情報を、それぞれ1枚のOHPシートに色シールを貼って示し、シートを選択しながら白地図に重ねることで必要な情報だけが見えるようにしました。さらに希望する子どもには住宅地全体を着色したシートを活用させました。それによって、子どもたちは自力解決を進めていきました。



【選択した視点の情報を見る】



【子どもの考えを関わらせる板書】

そして、子どもが表出した考えを、狭い道の様子と対比したり、また他の視点で見いだした様子と関係づけたりしながら板書上に示しました。このような板書を活用した学び合いを通して、子どもたちは、学校の周りの特色の一つとして広い道と狭い道の様子の共通点と差異点を捉えることができました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

過去、地域や立場の広がりの中で稲作に関する自然環境や携わる人々の営みを相互に関係づけ、我が国の農業の意味や価値を捉える力

思考活動

知識

稲作や流通に必要なもの(気温、日照時間、雪解け水、流域面積、品種、農事暦、コントリーエレベーター、流通経路等)を知っている。

本時では

県内の稲作農家の現状を知った子どもたちが、香川県の米づくりを元気にしようとそのヒントを稲作の盛んな庄内平野に求めます。前時までは、庄内平野の米づくりが盛んな理由を「豊富な水」と「広い平野」であると捉えていました。しかし、庄内平野の降水量は、稲作を行っている時期に限れば香川県と差はなく、「雪解け水」についての知識が十分でなければ、日照時間が長く温暖な香川県の方が米づくりに適しているのではないかと考えることが想定されました。



【雪の降る月を色分け】

そこで、庄内平野の降水量のグラフを雪が降る時期と雨が降る時期に色分けし、視覚的に捉えやすくして示すとともに、その雪が鳥海山などの山脈に積もっている写真も提示しました。そして色分けした部分を4月以降に移動させることで、春になるとその雪が雪解け水となり、稲作に必要な豊富な水になることを捉えられるようになりました。また、その豊富な水をポンプで広い平野の隅々まで送っている庄内平野と、ため池をつないで自然の傾斜を利用している香川県とを比べて話し合うことで、それぞれの自然や気候を人々はうまく利用しながら稲作を行い、国民の食生活を支えていることを捉えられました。



【山形県と香川県を比較】

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

「cm」や「mm」を用いて表された長さの相互関係を捉える力

思考活動

学習意欲(問いの生成)

同じ長さでも、いろいろな表し方があるようだ。単位による表し方の違いを知りたい。

知識・技能

ものさしの目盛りの仕組みについて知り、目盛りを正しく読むことができる。

本時では

離れた場所にいる2人が育てているミニトマトの茎の長さを、ものさしを使って比べる活動を通して、「8cm 5mm」「85mm」といった表し方の違う二つの長さの相互関係を捉える力の育成を目指しました。しかし前時まで「1cm=10mm」という単位の間接関係を学習している子どもは、量感を伴わず形式的な処理のみで問題解決してしまうことが想定されました。



【ものさしに書き込む】

そこで本時の導入において、2人の子どもが長さ比べをする場面をスライドで提示しました。スライドの中で、二つの茎の長さを並べて見せることで、「茎の長さはたぶん同じだと思うけど、2人の表し方が違う。ものさしを使って確かめてみたい。」と問いをもたせることができました。ものさしを使って実際に長さを測る際は、長さを表す印や数値等を自由に書き込めるように、下半分に白いシートを貼り付けたものさしを使わせました。シートに長さを表す印や数値を書き込めるようにしたことで、ものさしがずれても、目盛りを読み間違えることなく、正しく目盛りを読み、二つの長さが同じであることを確かめることができました。



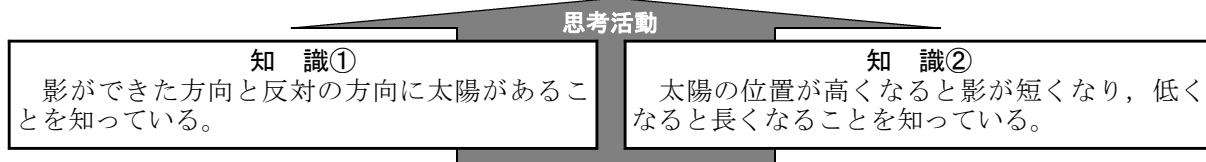
【目盛りの読み方を確認】

自力解決後、目盛りの読み方に絞ってペアで話し合う場を設定しました。話し合う内容を焦点化したことで、「二つの長さは、目盛りの読み方が違うだけで同じ。」と長さの相互関係を捉えていくことができました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

観測した時刻にできた影の位置を比較し、太陽の動き方を捉える力



本時では

影の観察記録を手がかりに、太陽の動き方を上記「知識」を活用しながら考えました。太陽の動き方を考えるには、まず太陽の位置を方位や高度から捉える必要があります。しかし、太陽は遠い空間にあるため捉えにくく、影と太陽の位置関係を想起できない子どものつまずきが予想されました。



そこで、矢印で簡略に示したプレートを使わせることで、「影の反対に太陽があった。」と再確認することができました。また、太陽の高度が変わると影の長さも変わることが一目で分かる太陽高度モデルの写真を提示しました。太陽高度モデルの高度を示す傾きの部分を強調することで、太陽高度の変化を想起することができました。また、実際に太陽高度モデルを操作することで、太陽の高度と影の長さとの関係を確認しようとする子どもも現れました。これらの働きかけによって、子どもたちは、自力で影の位置を比べていきました。ペアによる交流では「影は西から北を通して東へ動くから、太陽は東から南を通して西へ動きます。長い影は短くなり、また長い影になるから、太陽は低い所から高くなり、また低い所へ動きます。」と太陽に見立てた球を動かしながら、太陽の動き方をより明確に捉えた説明をする子どもの姿が見られました。

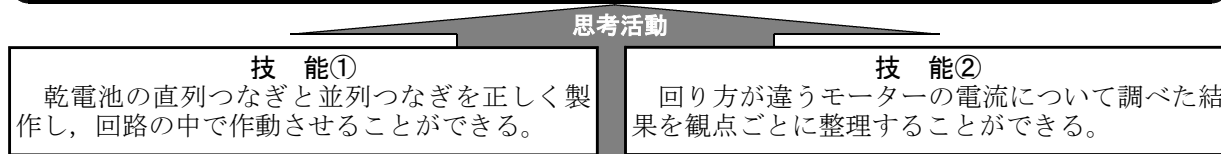


【太陽の動き方を説明】

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

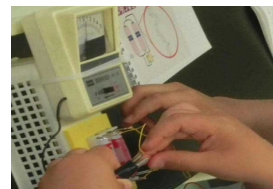
【単元で育成したい「思考力」】

モーターの回る向きや速さ(はたらき)の違いを、つなぎ方の違いとあわせて、電流の向きや大きさと関係づけて捉える力

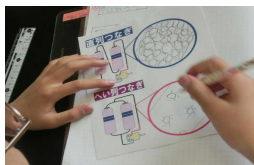


本時では

つなぎ方を変えるとモーターの回る速さが変わる様子を、流れる電流の大きさと関係づけて捉えていきました。子どもたちは、自分が考えた回路を製作し実験します。その際、自分の考え通りに回路を接続することができず、正確に実験できなかつたり、導線の接触不良によって回路に電流が流れなかつたりして、思考活動がスムーズに行えなくなる場合が想定されました。



そこで、乾電池ボックスを固定して回路を簡略化し、クリップを使って接触不良を軽減した実験ボードを使うことで、実験装置製作時のつまずきを軽減しました。それによって、「直列つなぎにすると、回路の中の電流が大きくなり、モーターが速く回った。」と、はたらきの違いを電流の大きさと関係づけて考えることができました。



【電流のイメージ図】

また、乾電池を直列につなぎ、モーターのはたらきが大きくなった時の電流のイメージを図に表し交流しました。描いた図を乾電池1個の時のイメージ図と比較して説明することで、「大きい電流が流れている」ことを表現できました。この図は、実験結果を確認し、はたらきが大きくなつたり(直列つなぎ)、変わらなかつたり(並列つなぎ)する理由を説明する際にも活用しました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

種まきや水やり等の体験とアサガオの様子から、アサガオへの関わり方についての価値や課題を捉える力

思考活動

知識・技能

今までしてきた種まきや水やり等の体験と、アサガオの様子を記録し、覚えている。

本時では

アサガオの生長の様子とその過程で行った世話を振り返って、今後の世話について話し合いました。アサガオへの関わり方についての価値や課題を捉えるためには、これまでの体験や様子を正確に振り返る必要があります。しかし、子どもにとってアサガオの世話は漠然としたものであり、具体的な内容が十分整理されていないことが想定されました。



【生長ブックの活用】

そこで、アサガオの世話と、生長の様子をそれぞれ整理して記録することができるアサガオ生長ブックを活用しました。ブックで生長過程を思い出したり、どれだけ水やりをしてきたかを振り返ったりすることで、子どもたちは「自分たちが頑張って水やりを続けたからアサガオが生長した。」ということに気がきました。そして、世話と生長の様子を関係づけて「水やりを続けること」の価値を捉えることができました。また、種から大きく生長していくアサガオの様子を身体表現する場を設定しました。アサガオの生長する様子を身体表現させることで「早く大きくなってね。」とアサガオの生長を願う、優しい気持ちが全体へ広がっていきました。



【生長の様子を体で表現】

授業後には「きれいな花を咲かせてほしいから、これからも水やりや肥料やり等の世話を続けよう。」と、熱心に世話をする子どもの姿が見られました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

歌詞の内容や曲想を基に、鑑賞している人に登場人物の心情が伝わるように自分たちの思いや意図をもって歌唱表現を工夫する力

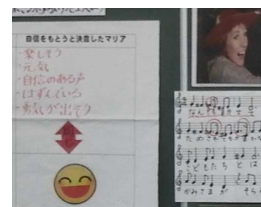
思考活動

知識・技能

顔の表情は、歌唱表現と深く関わりがあることを知り、そのことを歌唱表現に用いることができる。

本時では

子どもたちはミュージカル『さるかに』を演じていますが、十分に心情を伝えることができません。どんな時も笑顔で歌うのがよいと考えていたり、自分の表情を客観的に捉えられなかったりするために、上記「知識・技能」の活用が促されないのです。



【顔の表情と声の表情の関連を示す】

そこで、『サウンド・オブ・ミュージック』の主人公・マリアが歌う様子を見せ、心情の変化に伴い表情も変化していることに気付かせました。さらに、鏡を見ながら、さまざまな顔の表情で実際に歌う場を設けることで、子どもたちは、声と顔の表情が一致したとき、最も心情が伝わりやすいことにも気付いていきました。このような声の表情と顔の表情との関連は、板書上で一目で捉えられるようにしておきました。



【『さるかに』の歌唱表現を工夫】

その後、どんな表情で歌うと歌唱表現が工夫できるのか、グループの友達と鏡を使いながら表情を確認し合いました。子どもたちは、表情をそろえることで、自分たちの表したい心情が伝わることを実感していきました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

作例から感じたことを基に、伝えたい自分のイメージが表せるように名前の文字や背景に使う形や色を吟味する力

思考活動

意欲(学習目標の把握)

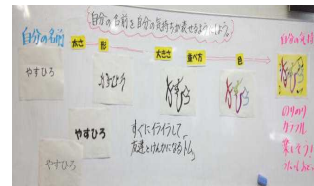
文字や背景で、自分の思いが伝えられる。

技能

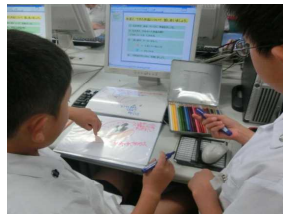
思いついた形や色を表すことができる。

本時では

自分のイメージがより表れるように、名前の文字の形や色の視点から表し方を工夫することをめあてとしました。しかし、文字を変えること自体のおもしろさに意識が向きすぎるため、形や色を工夫して自分のイメージを表すという意識が弱くなる子どもがいることが想定されました。そこで、工夫前の名前を黒板左に、完成後の作例を右に位置付け、その間に形や色を工夫した過程を提示しました、それにより「のりのりで歌って盛り上がっていることが表せるよ。」と、めあてを再確認でき、工夫の過程を振り返ることができました。



【変化の過程を提示】



【工夫前後の名前を重ねて】

また、画用紙に名前を表す時に、元の文字を描画ソフトを用いて思考する場をもちました。そうすることにより、大まかに形や色を変えてから細かい部分を変えていく子どもも、逆に、細かいところから工夫をして全体の形や色を考える子どもも、それぞれ自分のやりやすい方法で表し方を試しながらイメージに近づけようとすることができました。

終盤では、透明シートに印刷した工夫前の名前を、工夫後のものに重ねて、作品を鑑賞し合いました。これにより、工夫の前後が比較しやすくなり、イメージが表れている表現を捉えやすくなりました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

食生活における野菜不足の解決法を総合的に捉える力

思考活動

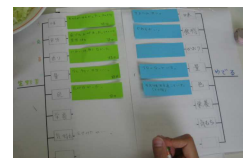
知識

野菜の調理法（生・ゆでる・いためる）それぞれの長所・短所を知っている。

本時では

生野菜とゆで野菜とを比較してそれぞれの調理法の長所を生かしたり、短所を補ったりしながら野菜不足の解決法を総合的に捉えさせたいと考えました。調理法の長所・短所を理解するためには、比較の際に何を見ていけばよいのか、どう判断したらよいのかを明確にしておく必要があります。

そこで、熊手チャート図に、比較する観点（味・食感・量・香り等）を書き出して視覚的に捉えられるようにしました。また、比較して気付いたことを付箋に記入し、左右で対比的に配列したチャート図に貼ることで、「生はかたいけれどゆでるとやわらかい。」等と情報が整理され、分かりやすくなりました。さらに、長所・短所を幅広い観点で判断するために、基準を「食べやすい」、「たくさん」、「栄養がとれる」のようなキーワードにすることで強調しました。考えを関わらせ合う場においても、キーワードとポジショニングマップ（横軸に「生・ゆでる」縦軸に「長所・短所」を設定したボード）を用い、付箋をどこに位置づけるか、その判断理由を話し合いました。



【熊手チャート図】



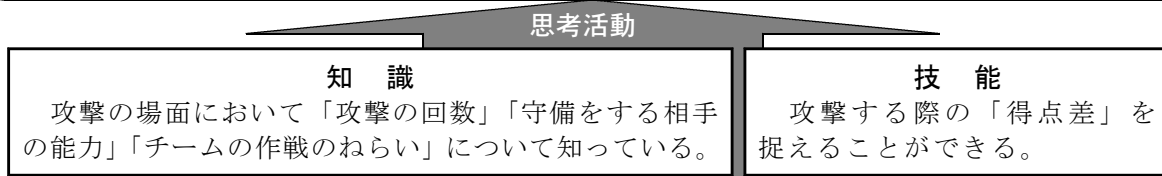
【ポジショニングマップの活用】

このような活動を通して調理法についての知識が確かなものとなり、「やわらかいとたくさん食べられるからゆで野菜を取り入れたい。」「スープならゆで汁に溶け出した栄養もむだにならない。」と解決法を考えることができました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

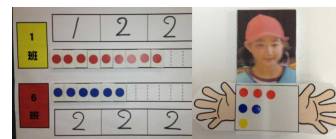
【単元で育成したい「思考力」】

チームの作戦をゲームの状況に応じて選択する力



本時では

フラッグフットボールにおいて、より適した作戦を選択する力の育成を目指しました。そのためには上記の「知識」「技能」が必要ですが、勝敗にこだわりすぎるあまり、状況を的確に捉えることができない子どもが想定されました。そこで「攻撃の回数」はイニングごとに得点を記録し、「得点差」は得点の合計をシールで表す等、視覚的に捉えやすくしました。また「守備能力」については、顔写真の下に守備の記録をシールで表し、シールが多い者には手を付け加えて守備能力の高さを際立たせました。さらに作戦名は「おとり作戦」のように動きを表す言葉に加え、「4点をねらう」等、その作戦のねらいも併せて付けさせるようにしました。



【得点状況と守備能力の明示】



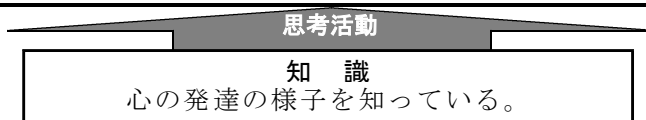
【動画を用いた振り返り】

ゲームでは作戦の成否を確かめるために、ICT機器を活用してゲームを撮影し、動画を手がかりにゲームを振り返る活動を設定しました。それにより「作戦通り動けていなかった。」「作戦が読まれていた。」等、得点ができなかった原因を捉えることができました。さらに、「3回目の攻撃だから・・・。」「4点差で負けているから・・・。」「相手の守備が〇〇さんだから・・・。」等、ゲームの状況を的確に捉えることができ、より適切な作戦を選ぶことにつなげることができました。

育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

今の成長段階として求められる心の状態と自分の心の状態とを照らし合わせながら、不安や悩みへの対処法を見いだす力



本時では

不安や悩みを抱える原因となりやすい、人との関わりについて考えていきました。人とうまく関わるためには、年齢とともに発達してきた心の働きを生かしていくことが必要です。しかし、心の発達をことばや図のみで示したとしても、一般的な特徴を表しているために、自分と関わるものであると実感することが難しいことが予想されました。



【心の発達の様子を体験化する】

そこで、人との関わりがうまくいった様子をロールプレイすることにししました。心の発達の様子をことばや行動に表し、実際に体験できるようにしたことで、子どもたちは、「心が発達してきているから、相手の気持ちが考えられたんだな。だから、人との関わりがうまくいったんだ。」等と、人との関わりの中にある発達している心の姿に気付いていきました。



【繰り返し学び合う】

その後、違った場面で、人との関わり方を考えました。まず、自分で台詞を考え、その後ペアで交流しました。交流の中で相手の関わり方のよさに気付いた際は、その都度付け加えたり、修正したりしました。さらに、ペアとペアで交流し、人と人が関わる様子を客観的にも捉えられるようにしました。このような学び合いを通して、子どもたちは今の自分ならどのような行動ができるか、心の発達と結びつけながらよりよい人との関わり方を見いだしていきました。

外国語活動の概要

「コミュニケーション能力の素地を養う」という学習指導要領に示された目標に迫るために、外国語活動における「思考力」を設定し、その育成に取り組んでいます。また昨年度は、次に示すように、特別支援教育の取り組みを参考に、「学習問題設定の場」「気付きの場」「アクティビティの場」における支援の在り方を見いだしました。(本年度実践に関係のある支援を抜粋)

- よけいな情報や操作を取り除いたり、気付かせたい事柄を強調したりして「気付き」が生まれやすくなる環境を整える。
- アクティビティの最中に個々が手がかりにできるような、視覚化・構造化された教材を準備する。
(詳細は、第96回教育研究発表会研究紀要参照)

本年度は、学年間の系統性を大切にすることで、より一層「思考力」の育成を図ることができると考え、昨年度から使っている『Hi, friends!』を基に、新たな年間指導計画を作成しました。『Hi, friends!』の単元構成に沿って、低学年では新しい語彙に出会うこと、中学年では語彙や表現に慣れ親しむことを重視した活動を設定することで、高学年におけるコミュニケーション活動がより充実したものになると考えています。以下に、年間指導計画を基に行った実践を紹介します。

実践紹介

低学年

第1学年「いくつもっているのかな？」
やまし あきよ きたやま けいた
山路 晃代 (HRT) 北山 啓太(JTE)

低学年では、自分の思いを言いたい、伝えたいと思わせる場が必要です。そこで袋の中のブロックの数が分からない場面を設定し『Hi, friends! 1』にある“**How many ~?**”という表現を使って尋ねたり、答えたりする学習につなげました。

まず、教師の袋に入っているブロックの数を予想し、自分の袋に同数入れて当てるゲームをしました。次に同じ数のブロックを持っている友達を探すゲームをしました。そうすることで、数を尋ねる必然性が生まれコミュニケーションが図れました。数を表す単語の表現が難しい子どもは、ブロックを並べて見せることで伝えることができました。



【同じ数の友達を探す】

中学年

第4学年「友達を見つけよう」
にしおか よしくに
西岡 由都 (HRT) ・John (ALT)

『Hi, friends! 1』に掲載されている20枚の絵カードを、それぞれ二つに切って40人に配りました。すると子どもたちは、「誰が自分と同じ絵カードを持っているのかな」という思いをもちました。そして、“**Do you have ~?**”と積極的にコミュニケーションを図っていきました。4年生時のこのような「絵」を用いたコミュニケーションが、6年生時に行われる「アルファベット」を用いたコミュニケーション“**Do you have “a”?**”(『Hi, friends! 2』)へと段階的につながっていくことが、子どもたちの姿から期待されました。



【持っている絵を尋ね合う】

高学年

第5学年「わたしの好きな物は」
なかた ゆうじ
中田 祐二 (HRT) ・John (ALT)

「cow」は牛を、「beef」は牛肉を表すように、英語では、動物を表す場合とその肉を表す場合とで表現が異なることがあります。

本実践では、「cow / beef」のように耳慣れた言葉から始め、HRTとALTの寸劇から“I like dogs. (犬が好き)”と“I like dog. (犬の肉が好き)”の違いに気付かせていきました。板書上には「s」の有無を強調して示すことで、子どもたちはその違いをはっきりと捉え、自信をもってコミュニケーションに臨んでいきました。



【‘s’の有無に気を付けて会話】

高学年

第6学年「お気に入りの国を紹介しよう」
みやざき あきら きたやま けいた
宮崎 彰 (HRT) ・北山 啓太(JTE)

自分のお気に入りの国を、その国の大使になって紹介することにしました。そこで、まずJTEがオーストラリアについて“**You can eat kangaroo.**”と紹介すると、子どもたちはびっくり。カンガルーを食べるという日本との食文化の違いに気付くことができました。そして「互いの国の文化を尊重する」「その国にしかないものを選ぶ」という観点を手がかりに、その国の紹介するものを選んでいきました。

紹介の手がかりとなるよう、黒板と連動した支援ボードを用いました。そのことで、どの子も自信をもってお気に入りの国を紹介することにつながりました。



【支援ボードを用いて交流】

書籍の紹介

『「学び合う学び」が深まる時』

石井順治著、2012、世織書房

著者は、授業を「学び合う学び」の場と捉えています。子どもが本当に学ぶとき、そこには、良質な他者との関わりが必要になってきます。友達との協同的な学びの中で、自分には生み出せなかった魅力的な考えに出会うことで、子どもたちは強い刺激を受け、新たな発見や探求心が生まれます。本著では、実際の授業における、子どもたちの「学び合う学び」の姿や、教師の支援の様子が具体的に紹介されています。子ども主体の授業づくりを目指す上で、大いに参考になる一冊です。（文：篠原^{しのはら} 智子^{ともこ}）

『ここがポイント 学級担任の特別支援教育 個別支援と一斉指導を一体化する学級経営』

河村茂雄編著、2005、図書文化社

子どもたちが授業の中で感じる困難さは、一人一人違います。それぞれの困難に対する個別のニーズに応じた支援が、今求められています。その際、個別支援と一斉指導を統合して考えていくことが有効となるでしょう。

本著では、特別支援教育の視点から、学級経営の工夫が事例を交えて示されています。子どもたちへの学習指導や、学び合いを支える安心した学級の雰囲気づくり等、学級集団づくりに役立つ内容となっています。（文：清水^{しみず} 顕人^{あきひと}）

特別支援教育の考えを生かして

教 頭 ^{やぶうち} 藪内 ^{まさあき} 雅昭

特別支援教育では、障害のある子どもたちの自立や社会参加に向けて、個の実態やニーズに対応したきめ細やかな指導や支援が行われています。学習面では、個によって特性がある見方や考え方を的確に把握しながら、それに応じた支援の在り方について、研究や実践が積み上げられています。いわば、徹底した子ども理解がなされ、学術的な裏付けを得ながら教育が行われていると考えています。私たちは、個別指導の場で築き上げてきた特別支援教育の考えの中から、学級全体の場における「思考力」育成の観点で、有効であると考えられる働きかけを取り入れようとしているのです。

幸い本校は、同じ市内にある附属特別支援学校と共に研究する体制が整っています。ユニバーサルデザインの授業づくりに向けてどのような取り組みができるのか、アドバイスを求めつつ研究を進めています。

あ と が き

副校長 ^{みやの} 宮野 ^{しんや} 真也

今回掲げる研究主題は2年次ですが、本校の「思考力」に特化した研究は11年目、ユニバーサルデザインの取り組みは3年目となるものです。これまでの研究実践から見いだした、「思考力」を育成するために有効なユニバーサルデザインの働きかけの要件を提案します。目下、その要件を編み込んだ授業公開に向け、教員一同、日々研鑽を積んでいるところです。

本年度の研究発表会には、文部科学省から水戸部先生（国語科）、澤井先生（社会科）、村山先生（理科）、丹野先生（特別支援教育）をお迎えします。

前回2日間で延べ1,700名の参会をいただきました。今回も大勢の先生方に参加いただき、熱く議論を交わすことができればと切に願っております。



【 編 集 委 員 】

中田 祐二
西岡 由都 森 真佐純
清水 顕人 白川 章弘
藤本 博文 中家 啓吾

平成25年10月31日

香川大学教育学部附属坂出小学校

【 TEL 】 0877-46-2692

【 FAX 】 0877-46-5218

【E-mail】 sakaide@ed.kagawa-u.ac.jp